

## ● 優秀賞

# 自分を見つめる心を育むIT活用の実践

鳥取県倉吉市立灘手小学校 やまわきたかふみ  
山脇隆史

## 1 はじめに

生きる力の育成と確かな学力の育成は、今日の学校教育において、最も重要な課題である。この課題の解決のために、すぐに効果が発揮される手だてではない。教師は、日々の学習指導を積み上げることを通して、課題の解決に取り組まなければならない。

私は、この課題の解決に近づくために、子どもたちに“自分を見つめる心を育む”学習指導に取り組んでいる。

子ども自身が、学習や体験の意味や価値について振り返り考えることができるなら、学習を深まりのあるものにすることができる。更に、自分を見つめる心を育てることは、人としてのよりよい成長のためにも不可欠であると考えるからである。

本学級においては、子どもが自分を見つめるための手だてとして、様々な学習指導に取り組んでいる。例えば、国語では生活の中の様々な出来事や思い出を作文として綴る作業を通して、子どもに心の内面の振り返りを促している。また、図画や音楽においては、思いを作品として表現することによって、自分の内面や友だちの内面に触れる活動に取り組んでいる。

更に、これら教科等における学習指導に加えて、ITを日常的に活用することで子どもが自分を見つめる心を育てることをねらいとした実践にも取り組んでいる。

本稿においては、子どもが自分を見つめる心を育むためにIT活用の実践について述べる。

## 2 本実践における仮説

本学級におけるITの教育への活用については、コミュニケーション能力の育成、思考力・判断力の育成など様々なねらいを持って取り組んでいる。

子どもたちは、コンピュータやIT機器への関心が高い。教科等における学習活動に、コンピュータやIT機器を活用することで子どもたちの関心や意欲が高まる様子が多くみられた。また、学習活動の様子をビデオカメラ等で撮影し振り返りの材料として提示することで、子どもたちの振り返りを深めることができた。

このような実態をふまえて、次のような仮説を立てた。

「日常的にITを用いて振り返り活動を働きかけることで、子どもの自分を見つめる心を育むことができる」

この仮説のもとで、実践に取り組んだ。

## 3 実践における留意点とITの位置づけ

子どもが自分の心を見つめるためには、心の内面を言葉や文字など目に見える物としてあらわして具体的な振り返りの対象とすることが必要である。

例えば、生活の振り返りの場面においては、作文等により心の内面を言葉で表し、文字(文章)にすることによって具体的な振り返りの対象とすることができる。しかし、子どもたちの中には、言葉や文字で自分自身を振

#### 4 実践の年間の見通し

り返ることを不得手とするものもある。また、子どもにとって、心の内面を言葉や文字として文章に書き表すことは高度な作業である。発達段階によっては、言葉と文字で自分を振り返ることに加えて、他の具体物を用いることで振り返りの情報を多くすることも必要である。

つまり、子どもたちの振り返りを深めるためには、振り返りのための敷居を低くして個に応じた取り組みを促すことが必要である。

本実践においては、個に応じた振り返りを促すための手だてとして、

- ①年間の指導計画において、子どもの実態に応じて“準備期”“実践期”“仕上げ期”のステップを設けて実践に取り組むこと。
  - ②振り返りのための材料として、作文や手紙、図画やスピーチ等に加えてITの活用など多様性を持って取り組むこと。
  - ③日常的にITを活用することができる学習環境を準備し、ITの活用を通して生活の振り返りを促す場を設けること
- の3点に留意した。

実践におけるITの活用については、②③に示すように子どもたちの振り返りを促すための道具として位置づけた。

1年間の活動計画については、資料1に示す年間指導計画を持って取り組んだ。

年間指導計画には、各教科や総合的な学習、学校行事、特別活動に加えて、ITの活用を日常生活に位置づけるために“自分を見つめる心を育てるIT活用体験”という項目を設定した。これは、他の教科等との関連を図りながら、ITを子どもの振り返りに活用するためには、ねらいを明確にして計画的に手だてを施すことが必要だと考えたからである。

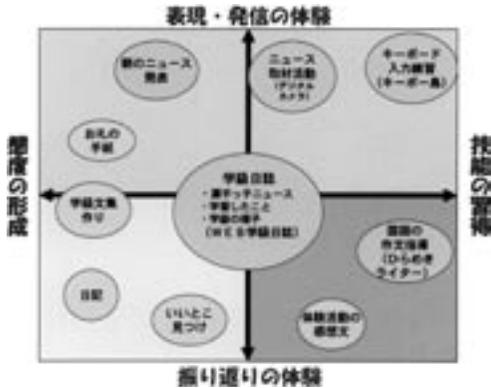
また、実践にあたっては、子どもたちの実態を考慮して1年の中に“準備期”“実践期”“仕上げ期”の3つのステップを設けて取り組んだ。(資料1)

それぞれの取り組みとねらいとの関係については資料2に示している。

子どもたちに振り返りを促すためには、多様な体験の中で自分の思いを表現・発信できる場を設けることが必要である。更には、それらはITを活用するための技能の習得と振り返りに取り組む態度の形成によって支えられている。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
学校行事	入学式 1年生を むかえる会 春学旅行	児童発表会 体験田 ごらん体験 秋遠足	もちきり 水泳大会	水泳大会	お年寄りと 交流会 運動会	お年寄りと 交流会 運動会 陸上大会	社会見学 稲刈り	秋祭り			新年 お楽しみ会	運動会 陸上大会	6年生 を送る会
学習における 体験活動	学びの うごころ 体験制作 90分制作		水泳大会 練習	園外キャンプ	運動会練習	学習発表会 練習						1年生振り返り を通して全学年 発表	
総合的な 学習の時間 12歳のハロー ワークプロジェクト		将来の夢 ハローワーク 体験調べ	アニーダー ネット出版 体験入学			お年寄りの 自分の仕事 (人形劇)	職場訪問 人の生き方 に学ぶ1	12歳の心を ふりかえって	文庫づくり	人の生き方 に学ぶ2	文庫制作		
自分を見つめる 心を育てる IT活用体験													

●資料1／灘手小学校6年 年間指導計画



●資料2／振り返りを促す活動とIT活用のねらいと関連

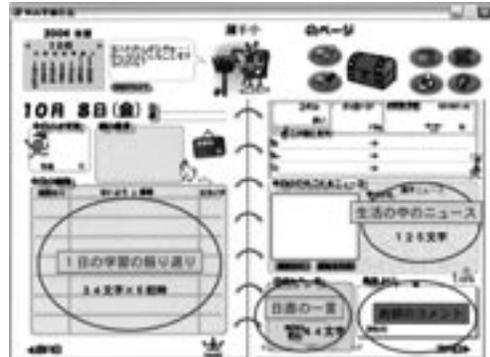
自分を見つめる心を育てるIT活用体験において、それぞれの学習や活動のねらいを相互に関連させて、子どもの振り返りを教育活動全体において働きかけるように意図している。

自分を見つめ振り返る心を育てるIT活用体験の柱として位置づけているのは、“WEB学級日誌”である。(資料3)

WEB学級日誌は、これまで一般的に扱われてきた学級日誌を元にして開発されたソフトウェアである。ソフトの画面表示を学級日誌に限定することによって子どもたちに理解されやすく、文字入力スキルを持つ子どもであるならばすぐに活用することができるように配慮されている。子どもの自発的な活用が、期待出来る教育用ソフトウェアである。

WEB学級日誌に書き込まれた内容については、コンピュータに取り込まれることによって、学級内での情報の共有や、ネットワークを介しての遠隔地にある他の学校との情報の共有についても可能にしている。

本学級では、ソフトの持つ文章と画像を組み合わせて記録する機能をいかして、子どもが日々の生活を振り返り、更に学級全体で振り返りを共有するためのツールとして活用している。



●資料3／WEB学級日誌のTOP画面

## 5 実践の実際

実践の実際にあたっては、1年間を“準備期”“実践期”“仕上げ期”の各ステップの取り組みを、取り組みの様子と実践のねらいと手だてという観点から述べる。

### (1) 準備期 (4月～7月)

準備期においては、子どもたちに様々な体験活動を働きかけると共に、ITを活用するためのスキルを鍛える期間と位置づけた。

この期間の大きな行事としては、修学旅行やどろんこフェスティバル、水泳練習などがあった。これらの活動において、日記や作文を用いて子どもたちの日々の活動の振り返りを働きかけた。

学級の実態として、子どもたちの中には、自分の生活に対して目を向けていくことに困難を感じる子どももいた。それは、文章として考えや思いを書き表すことに苦手意識を強く持っていることが原因であった。

そこで、付箋紙を活用して取材メモを作成したり、それぞれの取り組みを画像や映像で資料化し教室内に掲示したりして、振り返りを促す態度を育てる取り組みを実践した。

また、ITの活用においては、5年生までの段階において学習に活用した経験が少なく、ITの活用のためのスキルの個人差が大きい。

特に、キーボードを活用しての文字入力については、全く文字を入力することができない子どももおり個人差の解消を早急に行う必要があった。

そこで、子どもたちのキーボード入力のスキルを育成するために、全国小学校キーボード検定サイトキーボー島アドベンチャー（以後キーボー島）を活用して子どもたちのスキルアップにあたった。（資料4）

キーボー島とは、子どもたちのキーボード入力スキル育成のためのWEBサイトである。子どもたちの興味を高めるために、検定というスタイルをとり入れたり、ゲーム形式のプログラムを準備したりと子どもが楽しみながらキーボード入力のためのスキル習得ができるように工夫されている。

本学級の子どもたちは、文字入力について家庭にコンピュータを所有している3名の子どもを除いて、その他の子どもはキーボードを活用しての文字入力を行うことができなかった。しかし、キーボー島の取り組みをはじめ休憩時間等において練習を始めたところ、約2ヶ月程度でほとんどの子どもが文字入力のためのスキルを習得することができた。この結果、コンピュータを学習において活用するための、学級における下地を作ることができた。



●資料4／キーボー島アドベンチャー

学級内の子どもたちの文字入力のスキルは、キーボー島の検定においてに示すような状況である。（資料5）

準備期において各教科や総合的な学習の時間における多様な体験活動を働きかけ、ITを活用するための基礎となるスキルの習得を定着させることで、次のステップを迎える準備を整えることができた。

名誉島民	0	人
初 段	0	人
5 級 ～ 1 級	2	人
8 級 ～ 6 級	0	人
13 級 ～ 9 級	1	人
17 級 ～ 14 級	3	人
21 級 ～ 18 級	0	人
23 級 ～ 22 級	2	人
30 級 ～ 24 級	0	人

●資料5／文字入力スキルの状況（10月23日現在）

## (2)実践期（9月～12月）

実践期においては、運動面・文化面において様々な学校行事が実施される時期でもある。それらの学習活動と“自分を見つめ心を育てる”の活動を結びつけながら経験を積み上げる期間と位置づけた。

具体的には、WEB学級日誌への書き込みを、日直当番の柱の活動として位置づけ、1日の学習の振り返りやニュースの発表や取材に取り組んでいる。

資料6に示すのは、ある1日の日直の取り組みの様子である。WEB学級日誌への入力やニュース発表の取材について生活の中に日常的に取り組める時間を確保している。

このように、WEB学級日誌を活用した振り返り活動を日常的に取り組むことによって、子どもたちの経験を高め態度と技能の育成を促している。

また、発信された内容について学級内で発表したり掲示したりすることによって振り返りの共有化を図っている。（写真1, 2）

**6年 今週の学習予定** 8月31日～

行事	第1日(月)	第2日(火)	第3日(水)	第4日(木)	第5日(金)
1	国語	国語	国語	国語	国語
2	社会	社会	理科	算数	英語
3	理科	算数	国語	社会	英語
4	国語	算数	国語	社会	英語
5	国語	算数	国語	社会	英語
6	国語	算数	国語	社会	英語

※ 各授業時、タブレット端末を活用し、学習内容の共有や、学習成果の発表を行います。

●資料6／ある日の日直当番の取り組みの様子



●写真1／学級日誌掲示物



●写真2／学級日誌の書き込みの様子



●資料7／9月当初のWEB学級日誌の画面



●資料8／B児の記入したWEB学級日誌の画面

WEB学級日誌に書かれた内容について、情報を共有することの意味について以下のようなエピソードを振り返ることでその重要性を考えることができる。

WEB学級日誌に本格的に取り組み始めた9月当初の子どもたちは、日直の仕事として機械的に1日の生活について記録を行っていた。その内容については、資料7に示すような状況であった。

この時点では、学習の意味や自分が感じた内容などに振り返る書き込みはほとんどみられなかった。

このような状態での取り組みが続く中、B児が資料8に示すような書き込みを行った。B児は、WEB学級日誌への書き込みの中で1日の学習について自分自身を振り返り感想を盛り込んでいた。また、灘手っ子ニュース

## 6 実践の評価

のコーナーでも、自宅で起きた小さな出来事を取り上げ、それを他の友だちにできるだけよく分かるように書き込みに工夫を凝らしていた。

このB児の書き込みについて、翌朝の朝の会で取り上げた。WEB学級日誌に書き込みをする上でのモデルとして、

- ・単なる学習の記録を残すだけでなく、学習を通しての自分の振り返りを残すこと。
- ・学級内の他の友だちを意識して、書き込みを行うこと。

などの確認を行った。

B児のこの書き込みが、ターニングポイントになってその後の子供たちの書き込みの内容は大きく変化していった。

具体的な体験活動において感想文やお礼の手紙など多様な方法によって子どもたちの振り返りを促すことに加えて、WEB学級日誌が日常の取り組みの中に定着し、子どもたちの振り返りが深まりつつあることに対して手応えを感じている。

### (3)仕上げ期(1月～3月)

仕上げ期においては、1年間の活動について振り返りをを行いポートフォリオとして卒業文集の制作に取り組む。

この作業では、WEB学級日誌に蓄積した日々の学習や生活の記録を振り返りの素材とする。また、子どもたちが取材した写真データを元にして、卒業文集の制作も行う。

これらの作業については、ITの特徴を活かして子どもたちがデータを共有して、卒業文集を協同作業の中で作り上げる経験を働かせる。小学校生活の仕上げの段階として、学級全体での振り返りを促し子どもたち一人ひとりの態度の育成に取り組むことを予定している。

本実践における自分を見つめる心を育てるIT活用体験を評価するにあたって、実践の柱として取り組んだWEB学級日誌の活用について次の3つの項目について分析を行った。

- (1)日常的活用の定着度
- (2)書き込み文字数の推移
- (3)書き込み内容の変化

それぞれの分析について、以下に述べる。

#### (1)日常化の考察

ITの日常的活用の観点から、WEB学級日誌の定着度について分析する。

本学級の児童は全員で8名である。WEB学級日誌については、日直の仕事として位置づけられているので、約2週間に1回書き込みする機会がある。

WEB学級日誌の定着度を検討するために、9月以降に課業日において、WEB学級日誌の書き込みが可能だった日と実際の書き込みについて比べた。

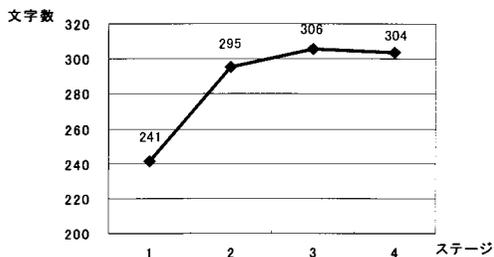
その結果、課業日におけるWEB学級日誌の書き込み率は100%であった。

このことから、WEB学級日誌は、日常的な活動として子どもたちの間に定着していると考えられる。

#### (2)書き込み文字数の比較分析

WEB学級日誌における子どもたちの振り返りの深まりについての指標として、書き込み文字数の推移について分析を行った。

子どもたちが、WEB学級日誌の全てのマスに文字を埋めた場合、369文字記入することができる。子どもたちの振り返りが深まっていたとするならば、書き込みする内容が増え、文字数も増加するのではないかと考えた。分析の手順として、子どもたち(全8名)が、全員1回ずつの取り組みを1ステージとして、8人の平均書き込み文字数について推移を分



●資料9／平均書き込み文字数の推移

析した。

資料9からWEB学級日誌に本格的に取り組みを始めた時点では、ほとんどの児童が250文字前後の書き込みに留まっていた。しかし、回数を重ねたり、参考になる子どもの書き込みを紹介したりすることによって、書き込み文字数が伸びている。第2ステージでは、一部の子どものを除いて350文字前後の書き込み

を行っている。その後の2回のステージでは、子どもたち各自の書き込み文字数は安定し300文字前後書き込みするようになっていた。

これらのことから、WEB学級日誌の取り組みを繰り返し、よりよい書き込みを求めて働きかけていくことによって、子どもたちの書き込み文字数は高まり安定しているのではないかと考えられる。

### (3)書き込み内容の分析

書き込み内容の分析については、(2)で示した各ステージの書き込みの傾向についてA児の書き込みに絞って分析を行った。

第1ステージでは、学習の振り返りの部分において学習内容の記録に留まっていた。しかし、第2ステージ以降は、34文字の中に学習内容の記録に関する書き込みと簡単な自分自



第1ステージ



第2ステージ



第3ステージ



第4ステージ

●資料10／A児のWEB学級日誌への書き込みの変化

身の振り返りを含めたコメントの書き込みが多くなってきている。

また、生活の中のニュースの書き込み内容については、事前の取材の対象が様々に変化している。身近な家庭での生活の中から話題を見つけるものや、台風や行事などトピック的な内容を紹介するものなど多岐にわたっている。

デジタルカメラの活用が深まるに連れて、書き込みされる内容についても深まりが出てきている。

内容の面についても、子どもたち同士の書き込みの内容について紹介する場を持つことが大きな働きかけになった。良い事例を見せることによって、子どもたちの書き込みは単なる記録から自己の学習の振り返りにまで発展することが分かった。

## 7 実践の成果と課題

実践に取り組むにあたって、“日常的にITを用いて振り返り活動を働きかけることで、子どもの自分を見つめる心を育むことができる”という仮説のもとで実践に取り組んだ。この結果、以下の点において成果と課題が明らかになった。

### (1)成果

- ① 年間の指導計画において、子どもの個々の実態に応じたステップをもうけることは、ITの活用を促す上で有効である。
- ② 振り返りのための材料として、日常的にコンピュータやIT機器を組み合わせて活用することで、子どもが自分を見つめる心を育む手だてとなる。
- ③ 子どもの振り返りを促すためには、子どもたち同士で振り返る方法や内容について共有することが有効である。

### (2)課題

- ① 日常的にITを用いて振り返りを促したが、全員の子どもについて同様の変化を確認することはできなかった。ITの活用については、個に応じた取り組みの一つと捉えて、多様な活動の中で子どもたちの心を育むことが求められる。

## 8 おわりに

生きる力の育成と確かな学力の育成のためには、子どもたちが自ら学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていける能力の育成が求められている。

これは、子どもたちの内面の問題であり、言うなれば心の問題と捉えられる。

ITの教育における活用についても、この課題に対して焦点を当てた実践研究を深めることが重要であると考えている。今後のITの活用については、子どもの心を育てることに焦点をあて実践深めていきたいと思う。

(ソフト提供)

バディ・コミュニケーション  
スズキ教育ソフト